第3種郵便物認可　京都新聞（夕刊）　2008年（平成20年）4月14日　月曜日

その11　京唐紙に学ぶ

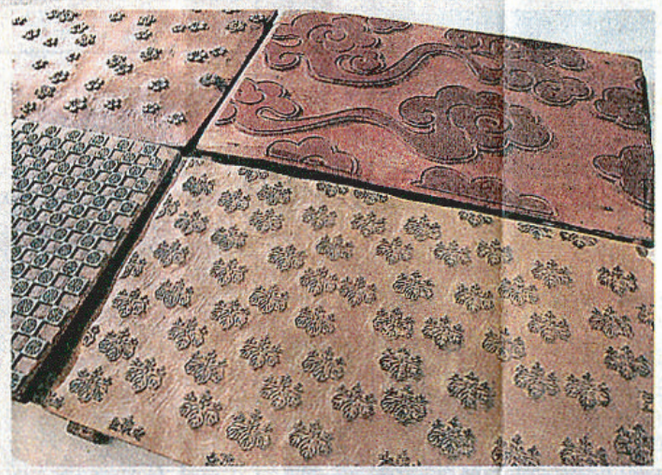
木林学のススメ

中川 典子

代々継承された文様の美

板木に絵の具をつけてこするのではなく、和紙にそっと模様を移してゆくように、唐紙を作る（京都市左京区修学院・唐長）

▲ 桐、桜、菊市松、天平大雲などの板木（京都市左京区修学院・唐長）



▲ 板木の文様は、かなり深く彫られている（京都市左京区修学院・唐長）

一枚の板木から生まれた洗練された文様の美しさ、色彩、手漉き和紙の風合い、キラ（雲母）と呼ばれる鉱物の輝き―京唐紙は、何度眺めても飽きることがありません。

すべての文様は、唐長さんの江戸時代から続く約六百五十枚の板木からなるものです。手にとって見せていただくと、文様の一つ一つが深く彫られ、まるで盛り上がっている突起のよう。彫り直しなどせず、長い年月を代々継承された文様の見事さに驚きました。

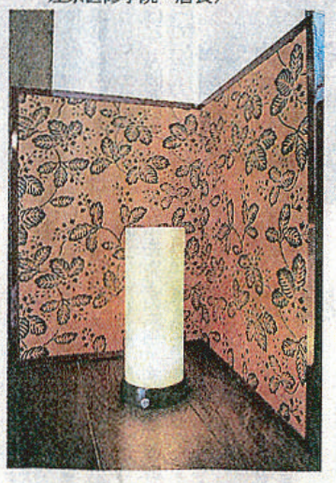
春らしい梅と桜の文様は、板木の裏に「文政六年　十二月吉日　吹よせ　唐紙屋長右衛門」とあり、唐長という名の由来がわかります。実際、目の前で、その板木で唐紙を作っていただくと、板木に絵の具をつけ、和紙をのせ、やさしく手で撫でるように見えました。「唐紙づくりは和紙に模様をこするのではなく、移していくんです。絵の具の載り方やその日の気温などを考えて、手技でコントロールする均一感が大事なんです」と千田聖二さん（37）。

江戸時代の板木のサイズは四十七㌢×二十八㌢。十二枚で一枚の襖紙ができます。明治時代になると四十七㌢×三十五㌢と大きくなり、十枚で襖紙一枚が完成します。ですから、同じ調子で作らないと襖紙はいびつなものになってしまいます。

板木の材は、すべて朴の木。灰緑色を帯びた広葉樹で、木質は柔らかいのですが、耐水性があります。鰻屋が朴のまな板を使うのは、目打ちをしても、弾力があるから元に戻る―と言い伝えがあり、朴は、唐紙作りの後の磨耗が少なかったのではと推察しました。

朴は、杢目の冬目と夏目の違いがはっきり出ないという点も、繊細な文様の邪魔にならなかったのでしょう。明かりの少ない時代に色絵の具を大切に使うには、土台になる板木に濃い色があれば、より鮮やかに映え、貴重な絵の具を無駄にせずに済んだのではないでしょうか。百年以上生き抜く一枚の板木は、さまざまなエピソードを物語り、改めて京唐紙のすごさを実感しました。

（銘木業見習）



唐紙の明かりと屏風（京都市左京区修学院・唐長）

京唐紙とインテリア　微妙な色の変化 モダンに

典子さんのポイント

四条烏丸にある「COCON烏丸」の大きな壁面は、ご存じの通り、唐長さんの文様「天平大雲」です。現代の建築においても、弘化二（一八四五）年の文様がまったく新しい形で溶け込んでいるのです。

唐長さんの修学院工房に、京唐紙の襖や照明、便せん、衝立、壁紙、コラージュの額などが展示されていました。インテリアとしても文様が映え、モダンな雰囲気を醸し出します。手加減でコントロールされていても、一つの文様ごとに色の載り方、かすれ具合は異なります。「その微妙な色の変化が空間をなごませてくれるのではないでしょうか」と千田聖二さん。

江戸時代は幾何学、明治時代は植物等の具象文様が流行っていたこと、うつろう京の四季折々の植物を愛でた文様が圧倒的に多いことなど、話を聞いていると、五感で得る暮らしの美の豊かさを感じます。その文様は不変のデザインにほかならない、ということを教えられました。

昨今、唐紙を貼る職人さんも減りました。聖二さん自らが、建築、施工に携わることもあります。若い方たちに本物志向の素晴らしさを体験してもらいたい、とワークショップを開催―と聞き、今度は、私も実際に彫ってみて、唐紙づくりの面白さを味わってみたいと思いました。もちろん、文様を守り続けた板木に敬意を表しながら…。

メモ

唐長の修学院工房は、京都市左京区修学院水川原町☎075（721）4422。京都市内に三条烏丸蛸薬師町店と、COCON烏丸内の四条烏丸店とがある。http://www.karacho.co.jp

次回は5月19日に掲載予定。